

両先生の御退職を記念して

国際関係学部長 永綱 憲悟

この小文は、野澤勝美先生並びに千葉則夫先生の御退職を記念し、感謝の思いをもって綴るものである。

野澤勝美先生は中央大学経済学部を卒業後、昭和38年より、アジア経済研究所という日本を代表するアジア地域についての総合的研究機関に35年間勤務された。研究所勤務中にはフィリピンを中心に研究分析を担当され、その間二度にわたりフィリピン大学に客員研究員として滞在されるなど現地に着した研究をされてきた。また同時に動向分析部研究主幹、国際交流室長などの要職にあられた。研究所御退職後の平成10年に亜細亜大学に赴任され、以後、昨年平成23年3月までの13年間、先生には亜細亜大学並びに国際関係学部のために、あらゆる面で多大なる貢献をいただいた。

まず教育面では、「現代フィリピン研究」「農業・農村開発論」という二つの重要な専門科目の講義、そしてゼミ、さらに経済学研究科の大学院科目も御担当いただき、多くの学生に、フィリピン及び農業開発論に関する先生の該博かつ実的な知識を教授されてきた。授業においては毎回数頁に及ぶレジュメを配布され、しばしば教室に農産物現物（飼料用トウモロコシや緑豆など）を持ち込み、受講者が実感を持って理解できるような工夫が続けられてきた。またゼミにおいては、農業貯蔵庫などを訪問し、関係者インタビューを実施するなど、現場との交流を重視された。いずれも準備や調整などに多くの労力のかかる作業であり、先生の教育へのためまぬ熱意を示すものであったと言えるであろう。

ついで学内行政面では、赴任直後より、図書館運営委員、入試委員、ゼミ連絡会議議長、大学院学務委員補佐、教務主任などの職務を歴任された。そ

して平成18年度から平成21年度までは国際関係学部長、あわせて亜細亜学園理事の要職にあった。とりわけ、英語EラーニングシステムやAUAPアリゾナ派遣制度導入などは学部長としての野澤先生のお力によるところ大であった。新たな制度導入には、幾多の障害やいくぶん理不尽な反対などがつきまとうものである。だが先生は、それらを前にして決して感情的になることなく関係諸方面に対して粘り強く説得を続け、最終的に懸案を解決されていった。その有様は、大学におけるリーダーシップのお手本ともいえるものであった。

またこの間、学外においても、一橋大学客員教授、大阪外語大学非常勤講師などを務められ、さらに国際協力銀行や経済産業省、国際協力事業団などの政府系機関から委託を受け調査研究ないしはアドバイザー的役割も果たされてきた。

このような多忙の職務にありながらも、先生は研究を怠ることなく、定期的なフィリピン現地調査を実施されてきた。そしてフィリピンにおける「伝統的水利組織」についての農村研究とあわせて、より広く「湾岸戦争とアキノ政権」といった国際政治研究まで、広範かつ詳細なフィリピン地域研究論文を数多く発表されてきた。赴任以来の13年間で『国際関係紀要』に掲載された先生の論文の数は実に14本にのぼる。しかも、この間『アジア研究所紀要』にも論文を発表され、あわせて報告書なども数多く執筆されてきたのである。驚くべき精励多産ぶりである。

このように、教育、行政職務、研究活動をいずれも怠ることなく積み上げていく先生のお姿は、一言でいうならば、「篤実」という言葉で最もよく表されるようなものであった。他者への非難も追従もなしに、また派手なパフォーマンスも大言壮語もなしに、目前の課題と与えられた職責を地道に果たしていく野澤先生の姿勢を学部教員全員が尊敬の眼差しで見つめてきたと括ることが出来るであろう。

千葉則夫先生は、早稲田大学大学院修士課程修了後、同大学非常勤講師等

を経て、昭和 54 年に亜細亜大学教養部に専任講師として赴任し、以後 33 年間にわたって亜細亜大学の発展に多大な貢献を示されてきた。

この間、昭和 63 年には教養部教授となり、平成 2 年、学部開設時より国際関係学部教授として学部教育に大いに尽力されてきた。とりわけ、AUAP 制度創設には直接的に関与され、平成元年前期には、147 名の経済学部国際関係学科（国際関係学部の前身）学生を率いて、第一回派遣プログラム（西ワシントン大学）に参画された。この AUAP について千葉先生は「継承すべき学園の遺産」として「誇りをもって振り返る」一文を寄せられている（『広報アジア』第 760 号）。

また平成 3 年 4 月より 3 年間、先生は学部教務主任を務められた。これはまさに、開設直後の国際関係学部の基本構造を作り上げ、それを完成させるという困難に満ちた職務であった。とくに多様な出自を持つ新学部教員の間で合意を形成して行く作業は並大抵のものではなかったと拝察される（新学部は、経済学部国際関係学科、教養部、アジア研究所、そして実務界を含めた外部からの教員で構成されていた）。その意味で現在の国際関係学部まで引き続く、率直な議論と寛容そして学部一致の精神は、この時の千葉先生の努力のもとに形成されたと言っても過言ではないであろう。

学部開設当時のエピソードを一つあげるならば、「会議室禁煙化」がある。今日でこそ、受動喫煙についての知識が普及し、学内の大部分の場所は原則禁煙となっているが当時はまだ会議室等に普通に灰皿が置かれている状況であった。そんな中で千葉先生は、（たしか当時の米国での禁煙常識などを披露しつつ）、会議中の禁煙を申し合わせるよう学部内世論を喚起し、見事にそれを実現された。実際、喫煙者は少数であり、多くの教員が千葉先生の提言に賛成したわけであるが、その意見を表立ってきちんと発言していくのは勇気を要する行為であった。小さなエピソードであるが、「非は非とし、是は是とする」という千葉先生の信条を示す出来事であった。

こうした千葉先生のお人柄は、おそらく「廉直 (upright)」という言葉で表現できるであろう。それは不正を許さず、ルールあるいは合意に従い、公

平に物事を進めていく姿勢である。それがあからこそ、多様な見解や立場のある学部教員を一つにまとめて運営していくことが出来たのである。しかし付言しておくべきは、廉直といっても、柔軟性に欠いたものではなく、人間味と優しさにあふれたものであったということである。千葉先生の研究室で香り高いコーヒーを楽しまれた先生方、また教員懇親の場に先生が持参されたカリフォルニア・ワインを味わった先生方はそのことを身をもって感じているはずである。

そうした姿勢は、教育面においても遺憾なく発揮されてきた。先生は、学部において、「アメリカ文化研究」「アメリカン・エスニシティ研究」の二つの重要な講義科目及びゼミなどを担当されてきたが、どの場面においても、受講者を甘やかすことなく、大量の英文教材を読ませ、小テストを実施し、さらにレポート等での無断引用等を戒める、というように厳しい教育を実行されてきた。だが同時に、学習サポートのための通信（メール）を毎回発信し、あわせてホームページを開設して学生の便宜を図るといった懇切丁寧な指導を欠かさず続けられてきた。千葉先生の授業にしっかりと付き従った学生達は卒業時に間違いなく高い達成感を覚えたであろう。

紙幅が尽きてきたが、先生のご研究面の業績についても欠かすわけにはいかない。初期のアメリカ文学研究に始まり、国際関係学部移籍以降のエスニシティ研究に至るまで、数多くの御著書・論文があるが、とくに平成15年に公刊された『W・E・B・デュボイス—人種平等獲得のための闘い—』（近代文芸社）は特筆に値するものである。わが国ではやや馴染みが薄いですが、デュボイスは20世紀前半に活躍した偉大な学者（ハーヴァード大学で博士号を得た最初の黒人であり、かのM・ヴェーバーとも交流があったといわれる）であり、同時に国際的な差別撤廃運動家（米国内黒人の権利獲得のみならずアフリカの地位向上にも尽力した）であった。千葉先生の御著書は、デュボイスの自伝を基礎に、広範な資料を参照しつつ、彼の生涯をたどった、わが国初の本格的デュボイス研究書である。今後関連分野で千葉先生の御著書が多く参照されることになるものと思える。

御著書での千葉先生の言によれば、デュボイス研究は、アメリカ留学から帰国した学生たちの人種問題への関心に応えていく中で、次第に深められてきたそうである。このように学生の問題関心を直視しつつ、同時に御自身の研究を熟成させていく姿勢もまたヒューマニティに富んだ廉直さの現れである。かくして我々が大いに見習うべき大学教員のあるべき姿を千葉先生は亜細亜大学在籍 33 年の中で身をもって示された来たたと括りうるであろう。

さて、このように両先生がしっかりと築いてこられた国際関係学部の教育研究体制を我々は引き継ぎ、いっそう発展させる義務を負っている。このことを確認したうえで、末尾となったが、両先生の今後の御健勝とさらなる御活躍を心より祈念して、筆を措くこととしたい。